



総合エレクトロニクス企業勤務
博士課程後期課程 在学生
井上 美和夏氏

学部で化学、電気工学を学んだ後、総合エレクトロニクス企業に就職。以来、技術者として半導体関連の設計に携わってきた。2007年、立命館MOT大学院入学。現在は、博士課程後期課程2年。

あなたの言いたいことが、 今、初めてわかりました

混沌としていた思考が
進化してカタチになった証拠

もし、他人から「言いたいことが、今、初めてわかった」と言われたら、どうだろう。あまりいい気分にならないかもしれない。しかし、井上美和夏さんが、論文の中間報告会で指導教員の青山教授からこの言葉を聞いたときの印象は違った。

「2つの意味で、感激しました。まず1つ目は、私が(博士課程前期・後期課程合わせて)3年以上かけて立命館MOT大学院で取り組んできたテーマが、カタチになりつつあるという手応えでした」

井上さんは、長年、総合エレクトロニクス企業で半導体の設計に携わってきたエンジニア。ここ数年は、生産プロセス全般における様々なインフ



「オペレーションズ
マネジメント」分野
立命館MOT大学院 教授
青山 敦氏

京都大学大学院修士課程修了後、研究員としてシンクタンクに勤務。1994年、米国パデュー大学よりPh.Dを授与される。英国ロンドン大学博士研究員、東京工業大学准教授を経て、2005年より現職。専門は、ライフサイクルエンジニアリング、技術知識基盤、プロセスシステム工学。

ラシステムづくり)に取組んでいる。「生産現場のあらゆる課題と向き合い、その改善策を仕組みとしてシステムに落とし込んでいく仕事です。私が主に取組んでいるのはナレッジマネジメントの領域。現場で働く1000名を超す人間が、起こりうる課題に対して有効な知識を共有するためのシステムづくり」だという。仕事で実際に直面している課題が、

井上さんの立命館MOT大学院での研究テーマとなっており、新たな課題を発見しては、研究テーマに加えてきた。

「最初は、設計行程で発生した失敗に對して、同じミスを繰り返さないための方策がテーマでした。やがて、まだ起こっていない失敗の一種「遅延」を未然に防ぐ方策に興味に移り、今回の中間報告会で発表したのは、もっと不透明な未来に対するもの。今後、企業はこれまで以上に難易度の高い問題に直面するはず。そんな漠然とした未来の難問に備えて、今、できることは何かを考えています。こうした興味は私の中では一貫性を持っていたのですが、論文にするうえで必要なストーリー性を欠いていました」

青山教授の「今、初めてわかった」という一言は、井上さんが論文にしたかったことが、人に伝わるほど理路整然とカタチになりつつある証明だったのだ。

成長や気づきを待ってくれる 指導方法への感謝

「2つ目は青山先生への感謝です」と井上さんは続ける。もともと、立命



2011年1月より、サテライト教室を大阪梅田に移転。より学びやすくなる。

館MOT大学院入学は、自身の仕事の位置付けを客観的に確認したかったから。半導体設計の支援ツールを作っていた頃は、外部の人たちと交流する機会が多かった。しかし現在のセクションに異動になってからは、社内で完結できる仕事ゆえに、「自分の仕事に価値はあるのか？」と常に不安だったという。

「青山ゼミを選んだのも、先生の専門領域が私の仕事内容に最も近く、議論することで成長できると思ったからです。これまで、先生とは十分にコミュニケーションをとってききました。後期課程に進学して、先生に指導教員をお願いしたのも信頼しているからこそ。それゆえに、先生のあの言葉は重みがありました。我慢強く、私の気づきを待っていてくれたのは、感激です」

職場では、多くの同僚たちを指導する立場にある井上さん。

「先生のあの言葉を聞いてから、理解できない報告や意見にも、一生懸命耳を傾けることを心掛けるようになりました」と言う。自発性を重視し、成長を我慢強く見守ってくれた恩師の姿が、井上さんの仕事に対しても好影響を与えている。